The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	舞台から退場するとき
Author(s)	池上, 日出夫
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 7-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

舞台から退場するとき

池　上　日出夫

芝居で、役者が舞台から退場するときには、非常に微妙な緊張がただようものだ。その役者がそれまで演じていた舞台の雰囲気と芝居全体の意味を損ねないように、そして次の舞台の展開に期待を持たせるような退場でなければならない。わたしは、大阪外国語大学という舞台で、30年近く「夜間」の舞台にあがって役を演じてきて、いま退場を目前にして、優れた役者の真似はできないとつくづく感じながらも、下手なりに役を演じてこられたことに深い感慨をもっている。舞台は、演じる役者が主に注目されるが、実はここのような裏方や観客がいなければ役者は存在しえない。わたしは、この舞台に出ていて、そのことをいつも痛切に感じていた。とくにある時期に、それまでの役者体験の総括的ともいえる演技を必要としたとき(『世界短編名作選—アメリカ編』の編集、『アメリカ黒人の解放と文学』の共同討議と著作、そして『アメリカ文学の源流マーク・トウエイン』の著作、その他の出版)、ここの「観客」である学生のまなざし、批判、熱意に教えられ、激励されてきたこと、そしてそのような観客がいなかったならば、到底それぞれの時期に演技の総括などは不可能であっただろうと思うのである。

わたしは、退場まぢかになって、実はいま「一人芝居」(日本学術振興会特別研究員等審査会の専門委員—英語・英米文学、文学一般)を演ずることになっているが(実は、英語学の専門家のご協力を得ている)、そこでは、かなり高度なアメリカ、イギリス、ローマ、ギリシャのもの、さらに日本の能までもレパートリーに入っている。この「一人芝居」を演じていて気づいたことは、大阪外国語大学という舞台で演じられているレパートリーのなかに

は、どうも既成のあるいは流行の理論的な枠組みに寄りかかりすぎているところが、少しあるのではないかということであった。わたしの「一人芝居」のレパートリーにもその傾向があり、独創的な論理によって構築された作品でなければ、感動的な舞台の演出は難しいと痛感している次第である。

だがわたしが自分の演じるものについて、こんな注文をつけることができるようになったのも、矢張りわたしの舞台を支えてきていただいた多くのかたがたがいたからだと思っている。下手な役者であったことをお詫びして、これで退場させていただきます。